

生活科

天満 弥生

1 生活科における「よりよい未来を志向する子」

現代の子どもにとって身近な人々・社会及び自然とかかわっていく直接体験の機会が減ってきている。子どもは直接体験を通して、発見したり感動したりしながら人間性を育んでいく。また、五感を使い、物事を感覚的にとらえる。そのため、子どもが身近な人々・社会及び自然と直接かかわる体験を充実させることが大切であると考えられる。

新学習指導要領では、具体的な活動や体験を通じて「身近な生活に関する見方・考え方」を生かし、自立し生活を豊かにしていくための資質・能力を育成することを明確にしている。その資質・能力の中でも特に、思考力、判断力、表現力等が具体的にできるように見直されている。具体的な活動を通して、どのような思考力・判断力・表現力等が発揮されるかを十分に検討する必要がある。また、低学年の子どもには具体的な活動を通して思考するという発達上の特徴があり、生活科を中心に指導の工夫や指導計画の作成を行うことと明記されている。このことから、これまで以上に低学年教育の中で生活科の位置付けが高まっていると言える。

本校の生活科では「やってみたい」「どうしてだろう」「できるようになりたい」といった自分の思いや願いをもてるような教材、対象との出会いを工夫する。「もっとしたい」という意欲が続く状態を保ち、目的意識をもち続けることができるようにする。そして、活動や体験で熱中し、没頭することで、発見したことや成功したことを表現する意欲をもてるようにする。他者に伝え、表現することで、気付いたことを交流し、一人一人の子どもの気付きの質を高めるようにする。そして、学習前と学習後での自分自身の成長に気付けるようふりかえりを工夫し、満足感、成就感を味わえるようにする。そして、自分のよさに気付き、意欲や自信をもってこれからの自分の生活に生かしていけるようにする。

以上のことから、生活科における「よりよい未来を志向する子」を次のようにとらえる。

- ・対象に対して自分の思いや願いをもち それを実現させるために行動し続ける子
- ・多様な学習活動の中で 気付いたことを交流し合い 対象にさらに働きかけたり気付きの質を高めたりする子
- ・自分自身の成長に気付き 満足感 成就感を味わいながら 意欲や自信をもってこれからの生活に生かそうとする子

2 生活科における決める授業デザイン

生活科の授業において、かかわる対象が子どもにとって身近であるか、くり返しかかわることができるか、子どもの発達に合っているかを十分に考えて対象を選ぶ必要がある。くり返しかかわることができる対象を選ぶことで、自分の思いや願いをもってじっくりかかわることができる。その対象と子どもが出会い、好奇心や探究心、対象への興味や親しみ、憧れなどからくる「やってみたい」「できるようになりたい」といった自分の思いや願いをもてるようにする。対象とかかわる具体的な活動や体験を通して、自分の思いや願いの実現をめざし、対象にどのように働きかけるのかを決める。そのために教材との出会わせ方、学びに対する意欲や見通しをもち続ける手だてを工夫する。

自分の思いや願いをもって多様な活動をしていく中で、低学年の子どもは、熱中し没頭したことや、発見、成功したときの自分のことを自然と誰かに伝えたいくなる。また、うまくいかないときには困っている自分のことを誰かに聞いてもらいたくなる。夢中になって友達と一緒に活動する中で交流をくり返し、思いや願いが高まっていく。対象と子どもとの間でも子どもの働きかけに対して対象がどのように変化するかといった交流がくり返される。このような交流を通して、多様な視点から根拠をもって対象とのかかわり方を決めることができるように手だてを工夫する。

具体的な体験や交流をくり返しながらか、対象への思いや願いを実現しようとする子どもの姿を見取る。そして子どもが満足感、成就感をもち、次の学習内容を決めることができるようにす

る。そのために子どもが自分自身の成長や変容に気付けるようにし、意欲や自信をもてるようにする。そして対象へのかかわりだけでなく、自分の生活に生かすことができるように手だてを工夫する。

3 決める授業の手だて

(1) 学びの原動力を形成する「決める」

子どもは、自分の生活や地域の中にある対象とかかわる中で、「～はどういうことだろう」「～はなんだろう」といった思いをふくらませる。その対象が、身近でくり返しかかわることができるものか、子どもがやってみたいという思いや願いをもてるかを教師が見極めて対象を選ぶ。また、日頃から子どもの遊びや生活の様子を見取り、どのようなことに興味をもっているのかなどの子どもの理解を深め、子どもの生活体験を生かして対象を選ぶ。例えば休み時間に子どもが見つめてきた生き物を素材として取り上げたり、遊びの中からもっと深めたい課題を設定したりする。そして、何をどうやって学ぶのか、どんな子どもの姿をめざすのかを明確にし、その姿をめざすための学習活動を考え、単元を構成する。対象と子どもを出会わせるときには、教師や友達が実際に遊んでいるところを見せたり、興味をひく単元名を提示したりして、「やってみよう」と子どもが思えるように対象の提示の仕方を工夫する。また、教室に本や写真を置いたり、子どもが見つけたものを飾ったりして、子どもが自然と対象に興味をもてるようにする。子どもが自分事として体験に没頭できるように、必要な物を事前に準備するなどの環境構成を工夫することで、子どもが対象への思いや願いをもち、どのようにかかわっていくのかを決めることができるようにする。

(2) 多様な視点から根拠をもって判断する「決める」

自分の思いや願いを実現しようとする過程で、子どもは自分の気付きや頑張っている自分のこと、困っている自分のことなどを伝えている。また、友達と同じ場で活動することで、友達のことを意識し、見比べ、新たな問題を発見し、解決していく。低学年の子どもは、共通の体験を通して、人と人とがつながっていく。そのため、体験的な活動を十分に保証する必要がある。また、子どもが言葉や絵、動作化など様々な方法で自分を表現しようとするときには、子どもが自分なりに思考し表現しようとするのを促していく。子ども同士が自然とかかわりをもてるように、友達の活動が見えるような活動場所を設定したり、全体交流の場と活動の場を分けたりするなどの工夫をして、場を設定する。

また、子どもの多様な気付きを共有化したり、可視化したり、活動や思考を促すような発問を考えたりする必要がある。そして、交流してきたことを板書で視点ごとに分類する。こうして子どもが多様な視点から根拠をもって対象とのかかわりを決めることができるようにする。

(3) 今までの学びをふり返り、未来に役立てる「決める」

低学年の子どもが自分の学びを実感するためには、表現活動を欠かすことはできない。そのために、子どもの思いや願いが実現できるように体験活動を充実させ、言葉や絵、動作化などの様々な表現活動を工夫し、体験活動と表現活動をくり返し行えるようにする。そうすることで、これまでの自分の学習をふり返ることにつながる。

また、単元の初めと終わりで、対象と自分とのかかわりや自分の思いや願いがどのように変容したのかを感じられるように、ふりかえりの軌跡を残す。また、友達のふりかえりにも目を向けられるようにし、自分のふりかえりと友達のふりかえりを見比べ、自分のふりかえりがこれでよいのかを決め直すきっかけとする。

年長児や、年上児との異学年交流などでは、ありがとうと言われたことや笑ってくれたことなどの一つ一つが自分の活動のふりかえりとなる。そのやりとりから、満足感、成就感が得られるように価値付けていく。

このようなふり返る活動を通して、一つ一つの気付きを関連付け、学びの質を高めていき、次の学びの意欲につなげ、自分の生活にも生かしていけるようにする。